

アグリランド・シティショップ 会長 篠崎 文子 氏に聞く



まちづくり団体インタビューとして、今回は宇都宮市の「アグリランド・シティショップ」にインタビューを実施しました。当団体は、宇都宮市生活改善クラブを母体に、市内の女性農業者の自立を目的として運営されています。安心・安全・新鮮で生産者の顔が見える農産物の販売を都市中心部のデパートで行うことにこだわって活動を続けております。

1. 活動の概要、経緯について

アグリランド・シティショップは、宇都宮市生活改善クラブの有志で組織された、女性農業者のグループです。平成3年6月に西武デパートで最初にオープンしました。そのころはバブル崩壊前で、農家の主婦がパートに出るようになっていたことに初代の御子貝会長が危機感を持ち、何とか農家の主婦が農業で生活できるような方法がないかと考えて始めたものです。また、郊外部には直売所がありましたが、地元農産物の多くが東京に出荷されている状況に疑問を感じ、地元の人に食べていただくには都市中心部に店を出すのがいい方法ではないかと考えたのです。それが大変好評で、まちの人たちに大事に育てていただいて、西武が閉店することになったときにもたくさんのお客様が「今度はどこでやるの?」と言ってくださいました。その後はお店を渡り歩くことになりましたが、私たちは生産者として都市中心部にこだわってお店を持ち続けています。

具体的な活動内容は、会員それぞれが収穫した農産物を個人で直接お店に持っていきます。お店には、地元農産物だから買いに来てくれるお客様が多いことから、会員をローテーションを組んで張りつけています。売上金の25%がテナント料やお店の運営資金となり、残りの75%が会員の銀行口座に振り込まれるようになっています。運営資金が余れば、会員参加の行事などに極力還元するようにしています。

2. 活動による地域への効果と影響について

お店には、近くにお住まいの方やお勤め帰りの方だけでなく、地元の農産物にこだわって、電車で来られる方や郊外から車で来られる方もいます。

自分たちの作った農産物やその加工品を自分たちで販売することで、お客様の動向やニーズがわかるようになりました。従来、農家の女性たちは、夫や家族に言われるままに農作業をしていただけでした。しかし今では、お店で得た情報を家に持ち帰って、自分の声を作物選びのところから反映できるようになりました。それを通じて家族内の話し合いも活発になりましたし、会員同士がよく連絡を取り合うので、お付き合いの範囲も広がりました。

私どもは、安全で安心な農産物を提供するために、減農薬・減化学肥料で栽培し、旬のものを中心に販売しておりますが、穴があいていると驚かれる方もいます。以前、お客様が3人いらしたとき、1人の

方が「あら、こんなに穴があいている」と言ったら、「いや、穴があいているのは虫が食べるほど安全で、農薬を使っていない証拠なのよ」と、お客様同士で話していました。私たちが説明するよりすごく効果があると思いました。

3. 活動上の困難や問題について

販売は当番制でやっていますが、体調を崩したり、急な用事ができたりということもあり、お店への会員の配置には神経を使います。ですから、デパートが閉店となる夕方7時半頃になると「ああ、今日は何もなくよかったな」とほっとします。13年もやっていると、誰が何を作るか大体わかっていますが、初めの頃は1人の人が多く作ってしまい、他の人が出荷できなかったこともありましたので、きちんと出荷計画を立てるようにしました。天候にも左右されてしまうので、あふれてしまうこともあれば足りないときもあって、お店の品揃えはなかなか難しいです。市場のように日本全国や外国から集めてくるなら何でも揃うと思いますが、準会員も入れて30名弱でやっていると、限られた種類になってしまいます。特に今は野菜に季節感がなくなっている時代ですから、夏に「大根はないの？」とおっしゃるお客様もいて、「北海道や高冷地でないと、夏に大根は無理なんです」という話をすることもあります。地元の農産物についてもっと知っていただく必要もあるかなと思っています。

運営にあたりましては、最初50名近く会員がいたのですが、今は30名弱に減っています。これは販売に立つのが面倒だったり、商売について会員それぞれの考え方の違いが原因だと思いますが、現在の会員は「アグリランドに入ると会議や食事会などの行事で友達の輪が広がるのでありがたい」と言ってくれます。資金面では、生活改善クラブとしては市から幾らかの補助制度がありますが、アグリランドは

同じ組織の中の一部ではあるのですが、補助は全くいただいていません。それでも独立した組織として資金的にはある程度うまく回っています。



【アグリランド・シティショップ】

4. 今後の展開や夢について

昔からある郷土食を出すレストランができればいいなと思っています。今は家庭でも個食が多くなり、若い方の家庭ではまな板や包丁がないこともあると聞いています。いま本物の味を若い方に伝えておかないと、私たちのところで途切れてしまうかもしれません。ですから、私たちがお役に立てることがあるのだと思っています。また、花を栽培している会員がいなかったの、農業士の方に相談しまして現在3人の若い方に花を出荷していただいています。こうしたことが農家の後継者育成に少しでもつながればと願っています。

これまで農業者は、自分が作った農産物に値札を付けられませんでした。アグリランドでは自分の好きな値段で売れるのです。もちろん市場の声を無視できませんが、自分で売れることは大変画期的なこと。皆さんが思っているほどアグリランドの仕事は大変ではありません。活動の楽しさをもっと訴えて、農家の女性の社会参加につながるよう、これからも会員を増やすことに努力していきたいと思っています。

【聞き手】とちぎ総合研究機構 地域創造部研究員 齊藤 博
(平成16年5月21日 インタビュー)